

パラオ

岩井 純

I. はじめに

日本航空・JAL ウェイズ チャーター直行便でパラオに向かったのは2010年7月下旬のことであった。直行便の場合、成田からパラオ国際空港までは4時間のフライトである。本稿をまとめるに当たって、ガイドの関澤氏（パラオ在住3年）・石川氏（パラオ在住2年半）・菊池氏（パラオ在住23年）に負うところが大きい。パラオはダイビングなど海洋レジャーで知られるが、太平洋戦争当時の戦跡が残っている国としても知られる。

II. 概 略

パラオ共和国は現地の言葉ではベラウ共和国という。ベラウは「神話、伝説」という意味である。この国は神話が多い。2006年、首都はコロールからマルキョクに移転した。コロール州とマルキョク州は対立してきた歴史があり、この国は州の力が強い。1783年、パラオ近海で座礁したイギリス東インド会社のアンテロープ号を救援したコロールの大酋長アイバドルとアンテロープ号乗員との交流が始まり、小銃を利用することのできたアイバドルはマルキョクを拠点とする大酋長アルクライに勝利した歴史がある。

1994年の独立にあたり、パラオはアメリカと自由連合協定（コンパクト）を締結した。コンパクトを締結することにより、パラオはアメリカから15年間の経済援助を受ける代わりに50年間の軍事権益を与えることになっていた。アメリカからの経済援助は2009年で打ち切られることになっていたのである。ところが、本年（2010年）も援助金を受けることができ、大統領の給料もあがったらしい。現大統領はジョンソン・トリビオン。第4代大統領であったナカムラ・クニオは父親が三重県出身の日系二世である。

パラオは日本の南方3000キロのところに位置し、586の島から構成されている。ここでは島の定義を「周囲が水で囲まれており、木が生えている陸地」としておく。パラオは火山島と石灰岩島からなり、人が住んでいるのは主として火山島（バベルダオブ島・コロール島・アラカベカサン島・マラカル島など）の方だが、ペリリュウ島やアンガウル島などの石灰岩島にも人が住んでいる。ほとんどが無人島で、有人島は9に過ぎないという。無人島のうち、上陸が可能なのは8島のみである。ペリリュウ島まではオプション・ツアーがあるものの国の南端にあるアンガウル島まで行くためには特別に船をチャーターしなければならない。北端のカヤンゲル島に行くのにも船をチャーターする必要がある。カヤンゲルはまだ開発されておらず、海の透明度は50メートルあり、海がきれいなまま残っているという。パラオには16の州があり、そのうちバベルダオブ島に10州ある。南のアンガウル島は日本からの遺骨収拾団が訪れる島のひとつであり、今は人よりもサルの方が多いという。

パラオの国土面積は459平方キロ、屋久島（505平方キロ）よりも小さい。パラオ諸島の

東方にはパラオ海溝がある。この国の最高地点はバベルダオブ島にあるゲレチュエルチュース山(200メートルほど)である。

パラオは浜が少ない。この国に自然災害はほとんどなく、4センチほどのものであっても津波警報が出るという。干満の差が2メートルあり、干潮のときにはマングローブの根が露出する。雨季(6月~10月)である今は湿度が85パーセントあるという。雨季と乾季で顕著な差異はないが、雨季になると風が西風になる。

教会の数は多い。3対7の割合で、プロテスタントよりもカトリックが多いという。少数ではあるがモデクゲイの信者がいる。モデクゲイの信者はアルモノグイ州のイボバンに集中しており、パラオの中でも偏在している。モデクゲイは1910年代初期にパラオに生まれた新宗教で、伝統宗教とカトリックとが融合したものである。

日本統治時代に水道や電気の設備がなされた。今は1軒に1台車があるといわれるが、雨が多いこともあってバイクや自転車を見かけることは少ない。

チョウチョウやトンボの類は1年中いる。菊池氏によると、パラオにいるセミの種類は2種類だという。パラオには犬・猫・豚・イノシシ・コウモリなどはいるが、猛獣はいないらしい。フルーツ・バット(コウモリ)はスープにして食べるという。サルはいるがシカはいない。ヘビやワニなどの爬虫類はいる。国鳥はビーブ(ホリイヒメアオバト)である。ビーブは小さい鳥で、ホーホーホーとサルのような声を出して鳴く。オウムをパラオ語では「ヤッコチャン」という。日本人が持ち込んだペットの名前が普通名詞として一般化したのだ。パラオにいるワニはイリエワニ(クロコダイル)で、夜行性である。ジュゴン(ミクロネシア)ではパラオのみに生息しているという。ジュゴンとマナティはどちらも海牛(かいぎゅう)類で似ているが分布域が異なり、また尾びれの形が異なっている。ジュゴンの尾びれはクジラと同じ三角形だが、マナティの尾びれはうちわ形(しゃもじ形)である。ここに生息しているのはマナティではなく、ジュゴンである。ジュゴンやアオウミガメのえさとして知られるアマモは「海草」とされる。アマモは草本性かつ沈水性の種子植物であり、胞子で増える藻類を「海藻」と表現するのと区別する。ヒルギのマングローブがある。そこに生息するマングローブガニは高価で販売される。ヒルギは塩分に強い。緑の葉の中に一部見られる黄色の葉は塩分を蓄積しており、落葉する運命にある。葉に含まれる成分を利用して健康茶(グアバ茶)として用いられるグアバがあり、ナンヨウスギがある。ヤシの実、液状胚乳(果実内部に溜まった水)は飲用に、固形胚乳は食用にする。

ビータルナッツと石灰(サンゴ粉)をビンロウジュの葉で包んで噛む、噛みタバコに似たものは13歳から許されているという。噛むと海から上がったときに体温が上昇してよいとのことであり、ドラッグではない。

パラオは小学校が8年、高校が4年という教育体制である。8年間の小学校が義務教育である。パラオ人はほとんどの人が英語を話すことができる。学校の授業は英語で行われている。だから、パラオ語は親が子に教えるのである。学校における体育の授業は週に1回だという。高校では日本語が選択科目になっている。

走っている自動車のほとんどは日本車である。中古で、2000~3000ドルで販売しているという。自動車教習所はなく、半日のテストで運転免許は取得できる。50ドルの費用で警察から運転免許をもらえるらしいが、運転技術は優れていても交通ルールは詳しくないという。右側通行であるが、車は右ハンドルである。右側通行はアメリカの影響であり、右ハンドルは日

本車が多いことによる。ガソリンの値段はリッター 100 円ほどである。

郵便は私書箱制であるため取りに行かねばならない。日本からの郵便は 10 日ほどで届くという。1 ヶ月間郵便物を取りにいくことなく放置しておくで没収されるらしい。テレビは普及している。

パラオの国旗は「日の丸」と似ている。青く広がる海に黄色の満月がデザインされている。

建築基準法なるものはないらしい。パラオでは成人になっても家族と同居し、家族が増えれば増築する。通気性のよい平屋造りが多く、増築するのは簡単らしい。

パラオの総人口は 2 万人。平均寿命は 70 歳ほど。日本の統治時代に日本語を覚えさせられた世代の多くは死亡したと思われる。それでも、年配の人は日本語が上手であるし、若い人は祖父母から日本語を教わるらしい。パラオ人はモンゴロイドであり、乳幼児に蒙古斑がある。関澤氏によると、この国の人の血液型は O 型が大部分を占め、A 型が少数存在するが AB 型はほとんどいないという。

日本人が経営するダイビング・ショップがあり、日本人ガイドも多い。312 人の日本人が登録して、ガイド・ダイビングのインストラクター・ホテル従業員等として働いているという。登録していない日本人もいるらしい。パラオ在住日本人の 1 人に倉田洋二氏がいる。90 歳近い高齢だが、アンガウル玉砕戦の生き残り、海洋環境保護に尽力している。

昨年、パラオを訪れた外国人観光客は 8 万人であったという。内訳は日本から 3 万 1000 人、台湾から 2 万 9000 人だった。日本人観光客が多いが、最近は台湾からの直行便があるという。この国は観光業がさかんで、年間 8 万～9 万の観光客が訪れるが、15 万を越えると海が汚れ、環境が破壊されると言われている。この国ではレンジャーといわれる海のパトロール隊が見回りをしている。

漁業はもちろん、農業も行われている。果物、グアバ、タピオカなどは栽培しているが、米は作っていない。米はカリフォルニア米を輸入しており、それに、フィリピンからも輸入しているらしい。日本から米の輸入はしておらず、石川氏によると「秋田小町」は中国から輸入しているのだという。韓国からは「銀米」を輸入している。輸入品はコンスタントに入ってくるわけではないらしい。冷凍品の形で入ってくるものもある。

賑わいを感じるのはミクロネシア・ゲームが開催されるためらしい。ミクロネシア・ゲームは 4 年に 1 度開催されるミクロネシア最大のスポーツのイベントで、ミクロネシアのオリンピックと言われる。10 の国・地域が参加し、野球・サッカー・テニス等が行われる。第 7 回ミクロネシアゲームズが 8 月 1 日から 10 日間、今年はパラオで開催されるのである。開催前日の 7 月 31 日には聖火リレーが行われた。パラオでは野球やバスケットボールを好む人が多く、旭球場にはナイター設備がある。

昨夜、海に車が落下したらしく、消防車やパトカーが出動していた。週末・金曜日には酒に酔って車を運転する人がいて、縁石を乗り越えて海に落ちる車がよくあるという。

ゴミをゴミ箱に捨てる習慣はないらしい。しかし、自宅のゴミはスーパーでもらった袋に入れて、決められたゴミ収集の場所に持っていくという。

Ⅲ. バベルダオブ島

バベルダオブ島はパラオ語で「本島」の意味だという。本島には 10 の州がある。島の面積

は約 332 平方キロ、小豆島 (153 平方キロ) 二つ分よりも大きい。この島の人口は 3500 人。本島の人は家の敷地に野菜や果物を作っている。もっとも、夏野菜だけしか採れないようだ。パラオ人の場合は海に入るのに許可証はいらない。島の土地の 8 割はジャングルで、木に覆われている。オーストラリアから牛を導入し、パラオ牛をつくろうとしたが失敗した。放牧したが栄養のある草がなかったのである。しかし、今オーストラリアからの牛の導入を再開した。

バベルダオブ島を周回する道路「コンパクトロード」は、アメリカの援助によって 2007 年 10 月に完成した。コロールからマルキョクへの首都移転計画による、1 周 88 キロメートルの国道である。しかし、昨年 8 月、10 日間降り続いた大雨により道路が陥没してしまった。陥没した箇所は修復するのに 3 年かかると言われているが、そこを修復することなく、傍らに側道を完成させた。たった 1 日で造った、その側道を今も使っている。本島の制限速度は時速 60 キロほどのようだ。週末にはコンパクトロードを使用して、地元の人々のトライアスロンが行われるという。12 月には小規模ではあるが日本人によるレイニンボー・トライアスロンがある。4 コースが設定されるらしい。オリンピックタイプのコースは 51.5 km (スイム 1.5 km、バイク 40 km、ラン 10 km) で、アラマベサン島にある「パラオ・パシフィック・リゾート (PPR)」を起点としてスイミングからスタートする。スイミングはパラオ・パシフィック・リゾートのプライベートビーチ沖の海域で行われる。自転車は PPR からコンパクトロードを折り返してくる。ランニングは PPR からマラカル島を折り返す行程である。

本島の横断道を造っている。実際の道路工事にはインドネシア人やバングラデシュ人を雇っているという。パラオ人は監督をしても、道路工事といった肉体労働はしたがるようだ。インドネシア人やバングラデシュ人もパラオに住んでいる。横断道は 3 本造っており、工事はかなり進んでいるが、まだ完成はしていない。

コロール島とバベルダオブ島を結んでいるのが KB ブリッジである。旧 KB ブリッジは 1977 年に韓国の建設会社 SICIO によって建設されたが、1996 年 9 月 26 日、中央部から二つに折れて崩落してしまった。日本は仮設橋の設置などの支援を行った。そのときの仮設橋の跡がある。2002 年 1 月、日本の政府開発援助 (ODA) で鹿島建設によって新 KB ブリッジ (日本・パラオ友好の橋 = ジャパンパラオフレンドシップブリッジ) が建設された。新 KB ブリッジの長さは 413 メートル。

本島からコロールに通勤する人が多い。新 KB ブリッジから、沖合いに軍艦島が見える。この島は米軍の激しい爆撃により 2 つの島に割れたのだという。1944 年 3 月 30 日～31 日、コロール大空襲があった。

本島にはアメリカのキャンプがある。コロール側から KB ブリッジを渡るとアイライ州に入る。アイライ州には旧日本軍受信司令部跡がある。太平洋戦争時、この島も爆撃をされている。残骸となった建物のそばに、別の場所にあった戦車を移動させてきて置いてある。司令部跡を観光地化しようとしているのだ。今の空港、パラオ国際空港は日本の援助によって 2003 年に完成した。以前の空港の規模は現空港の 3 分の 1 であったという。現空港の滑走路の長さは 1800 メートルほどである。以前の空港の、古い建物は新しい建物に隣接してあり、カフェとして使用している。日中は台湾やフィリピンからのフライトしかないらしい。韓国や台湾からは直行便が週 4 便ある。日本からのチャーター便は週 1 便だが、お盆の頃は週 3 便になるといふ。

台湾資本によるゴルフ練習場がある。アイミリイキ州にゴルフ場をつくる話もある。

「バイ」は平面の形が長方形をした建物で、集会場としてのバイ、子供の教育用のバイ、住居としてのバイに分かれていた。バイはパラオに4つしか残っていない。部族間の争いで失われたのである。アイライ・バイは残存している4つの中で最古のバイで、集会場である。アイライ・バイの中に入ると、床一面に板が敷かれている。板の中には小さな穴（切り込み）のあるものがある。これはトイレなのだが、「小さな穴」がトイレなのではない。1枚の板に2箇所、穴があいていて、その穴に手をかけて板を持ち上げる。はずした板1枚の部分がトイレとなる。はずせるように穴を開けた板はたくさんあり、トイレの数は多い。トイレとしての個室はなく、便器もない。

顔の絵を描いた柱はここに集まった酋長の背もたれとして用いられた。16州の酋長のための柱であり、片側に8本、それを合わせて16本の柱が酋長の背もたれに用意されていた。酋長のための柱には「顔」と「クモ」がセットで描かれている。マネーバードも描かれているが、このマネーバードは鶏である。マルキョク州のマネーバードはヤンバルクイナである。マネーバードはお金を食べて、それを増やしてくれるのだという。入り口は小さく、頭を下げなければ入れない。入り口の上部にコウモリが描かれている。コウモリは頭を下にしてぶら下がる動物なので、バイに入るときには頭を下げるようにということを表現している。偉い人が集まるので、頭を低くするようにというのである。内部には囲炉裏のような、火を起こす場所が2箇所ある。バイは女人禁制ゆえ、酋長の妻であっても入ることはできなかった。妻たちが入り口まで運んできた食べ物を、囲炉裏で酋長自身が温めなおしたのであろう。女人禁制とされてはいたが、他の村から来た売春婦は時間になるとバイの中に入り、酋長たちにサービスしたのである。バイに描かれた絵は最近修復され、塗り直されている。

ハイビスカスは薬として利用するという。タピオカはヒョロヒョロとした細長い木である。バナナは5種類ほどある。冬も木々は緑の葉をつけており、花の咲く時期はあるものの景観は1年中変わらない。

エサール州を流れる「清水川」ではジャングルリバーボートクルーズが行われる。エサール州には、日本統治時代、開拓村である清水村があり、500人の日本人がいたという。清水村は残っていない。清水村だけではなく、開拓村であった朝日村（アルモノグイ州）・大和村（ガスパン州にあったらしい）・瑞穂村（アイライ州にあったらしい）なども名前が残っているだけでジャングルになっている。リバークルーズの入り口にはバイを模した建物があり、そこから徒歩5分ほどのところにあるボート乗り場にもバイを模した建物がある。クルーズ入り口には、ワニ園で生まれた子供のワニが、囲いの中で飼育されている。入り口からボート乗り場に行く間に、サガリバナがあった。花が落ちていたのは、サガリバナは夜咲いて朝散るからだという。ナンヨウベッコウトンボもいた。樹齢70年程と思われるマホガニーがある。マホガニーはストーリー・ボード（パラオの神話や伝説を木に彫刻した民芸品）に使用されている木である。入り口からボート乗り場に向かう道は、開拓村時代の日本人が造った道で、そこを歩いていく。ボート乗り場のバイ風建物には、マングローブガニを捕獲する昔の籠やウナギを捕獲する道具を展示してあった。清水川は海につながっており、海に出て帰ってくる1時間ほどのクルーズが行われている。清水川にはワニがいる。パラオでこわいのはワニぐらいであるが、ワニは現在保護動物であり、捕獲してはいけないことになっている。昔、捕獲してもよかった時代には命を落とした人もあったらしい。ワニの種類は世界で23種類あると言われる

が、ここにいるのはクロコダイル科のイリエワニ1種類のみである。クロコダイルとアリゲーターは歯の生え方で見分ける。下あごの第4歯が上あごの穴に収まっているのがアリゲーター、牙のように外に出ているのがクロコダイルである。テッポウウオが泳いでいる。テッポウウオは汽水域に棲んでいる。川に沿ってカニ穴がある。マングローブガニが棲んでいる。このカニはレストランで食べることができる。川に沈めてある、カニを捕獲するための金網の仕掛けをガイドが引き上げたところ一匹のマングローブガニが入っていた。マングローブガニは大きい。仕掛けは鶏肉を餌とする。川辺にはタコノキが生えている。葉が硬くて、剣状の葉が折れ曲がっている。この川に沿ってあるマングローブの林は、9種類の植物からなっている。マングローブの林は河口汽水域の塩性湿地に形成される。アカバナヒルギモドキはコウモリ（フルーツ・バット）の餌になる。ハウガンヒルギ（英語ではキャノン・ボウルという）の実は染料になる。ヤエヤマヒルギは、支柱根が幹を支えるように生えている。マングローブを構成する植物で、海沿いにしか生えないマヤブシキもある。エサール州の人口は200人。エサール・ビレッジは島の東側にあり、漁師の家がある。自給自足の生活に近い人もいるらしい。コウモリは5ドル、カニは12ドルで売れるという。この州は8割が漁業に従事しており、2割が公務員だと言われる。ちなみに、公務員は2時間の昼休みがあるという。

本島の周回道路ができて車が使えるようになった。電気が供給されているのでテレビを見ることはもちろん、インターネットを使うこともでき、便利な生活ができる。川から見える山の上に、3本のモミの木の一つらしきものがある。かつてアメリカ人が住んでいたところに、木だけが残ったものらしい。カラスモドキという黒い鳥が飛んでいる。船の正面に見える、築70年ほどの家はこの州選出の国会議員の父母の家だという。議員の名前はクニヒロとのことだから日系2世かもしれない。

マルキョク州には300人ほどが住んでいる。2006年10月1日、コロールからマルキョクに首都が移転した。首都として機能はしているようである。コロールには人口が集中しているので、それを分散させようという意図もあった。小さなローカル・マーケットがある。集落から少し離れた丘の上にパラオの国会議事堂であるモスクのような白い建物が建っている。議事堂の建物は台湾からの借款により、25億円の費用で建てたという。建築基準法がない国なので、柱など堅固に構築されているとはいえないようだ。議事堂はパラオ語で「こそこそ話・秘密の場所」という意味の名称になっており、女神の絵が描かれている。国会議員は25名、そのうち上院が16名、下院が9名である。大統領オフィスもある。ここに設置された裁判所は土地問題を扱っているという。土地に関しては外国人が絡んだ争いが多い。ちなみに、パラオでは外国人が土地を所有することはできないことになっている。コロールにある旧裁判所は一般の民事・刑事を扱っているらしい。ここにある裁判所の建物にはクモ・魚・マネーバードの装飾がある。クモは安産のための守り神である。パラオでは、帝王切開をして、生まれてくる子供を掻き出していたが、クモの自然分娩を見て自然分娩をするようになったのだという言い伝えがある。魚の群れはリーダーの動きに従って動く。魚の絵は統率力を表している。マネーバードは幸運や富を運んでくれるという鳥である。

酋長は今もいる。大酋長は大統領のアドバイザーの立場にあるらしい。首都移転に関しては2人の大酋長の意向が反映されていると言われる。200~300人いる政府職員はコロールに住んでいる。マルキョク州にゴルフ場を造るという案もあるらしい。

国会議事堂の建つ丘の下には、海沿いにマルキョク・ビレッジがある。タロイモの畑があ

り、集会所がある。ここにはコテージはあるが、ホテルはない。マルキョク小学校がある。州唯一のインターネットカフェもある。金持ちの家があるが、塀は正面のみで家全体を囲んでいるのではない。マルキョク・ビーチは浜が広がっていて、波があるのでサーフィンができる。サーフィンができるのはパラオではここぐらいである。

ガラルド州は、戦時中ペリリュー島の住民が避難させられていたところである。ガラルドヒルズからはサンゴ礁で砕ける白い波が見える。

アルコロン州はこの島の最北端にある。小学校が見えるが、今は夏休みである。アルコロン州にあるバドルルアウ遺跡はストーンフェイス（人面石）やストーンモノリス（石の柱）のあることで知られる。ストーンフェイスはパラオ中にあるが、いつごろ、誰が作ったのか不明の石造物である。石に顔を彫ったもので、目や口がなんとなくわかる。ストーンフェイスはアルコロン州に集中してあるが、マルキョク・ビレッジにもあり、マルキョク・ビレッジのストーンフェイスは海に向かって立っている。バドルルアウにあるストーンフェイスやストーンモノリスは高床式のパイを造ろうとしていたのではないかとされている。石の柱は36あり、ストーンフェイスは5ある。ストーンフェイスは遺跡の東西南北それに真ん中にある。真ん中の「顔」は南を向いており、他のそれぞれの「顔」は内側を向いている。これらの巨石は玄武岩である。ハンカチノキがある。花に近い葉が、白い。ノニ（日本名はヤエヤマアオキ）も自生している。ノニは万能薬として用いられてきた。糖尿病にも効果があり、下痢止めにもなるという。

ガラスマオ州には、幅約20メートルのガラスマオの滝がある。本島には小さいものも含めると8箇所に滝があるという。ガラスマオの滝は高さが20メートルとも30メートルとも言われるが、乾季になると水量がごくわずかになるらしい。今は採掘していないが、日本統治時代に行っていたボーキサイトの採掘跡がある。滝の近くには運搬に用いていたトロッコの施設跡もあるという。国道からすぐの山の斜面に、錆ついた高射機関砲が残っている。弾薬庫に使われていた穴が最近発見された。茂みはあるものの蚊などの虫は少ない。

日本統治時代、日本人が経営していたパイナップル工場の跡がある。釜が残っており、ここでは缶詰をつくっていた。道を挟んで向かい側には彗星（旧日本海軍の艦上爆撃機）が墜落したまま放置されている。彗星墜落の地と工場跡地はアルモノグイ州政府が管理している。

ガスパン州には日本統治時代の鉄塔（国際無線電信塔）が倒れたまま放置されている。

ガスパンの滝には深い滝つぼがある。以前はここで泳ぐ人もいたが、ワニが出るとのことで今はここで泳ぐ人はいない。ガラスマオの滝には滝つぼと言えるほどのものは無い。ガスパンの滝は高さ4.5メートル・幅25メートルと言われるから、幅は同じぐらいだがガラスマオの滝の方が高さは高い。ガラスマオの滝は台湾等からの多くの観光客が毎日訪れるが、こちらを訪れる観光客は少ない。

アイミリイキ州にケズ（このケズは地名を取ってエレウイ・テラスとも呼ばれ、ピラミッド状の地形をしている）がある。ケズは何層にも築かれた土壇で、古墳ではないかと思われる。ケズはかなりの数が本島にあるものの、石灰岩の島にはない。ボロブドゥールに似たものがあり、インドネシアとのつながりを強調する人もいる。しかし、絵文字しかなかったので、詳しいことはわからない。

この島の人口は、現在3500人ほどだが、大戦中には3万5000人ほどいたという。ここでは戦闘そのものよりも、飢えで死ぬ人が多かったらしい。

IV. コロール島

「パラオ松島」を眺めることのできるホテルとして「ホテル・ニッコウ・パラオ」があった。このホテルは2002年に閉鎖したが、その近くに官幣大社である南洋神社があった。南洋神社は天照大神を祭神として1940（昭和15）年に創建された。大きな神社で参道もあったが、当時のもので残っているのは「社号を表示する朽ちた木の柱」・石灯籠・太鼓橋の一部、である。アルミス高地にある南洋神社跡は、今は民家の敷地となっている。1997年、そこに清流社（政治団体）によって小規模な社殿が再建された。「旧官幣大社南洋神社再建趣旨」を刻んだ石碑は、社殿再建と同じ1997（平成9）年に建てられたものである。南洋神社跡が私有地となっているのは、その地にある民家の父親が実力者で、州政府から譲り受けたという経緯があるらしい。菊池氏によると、パラオ全体では17の神社があったという。

ダウンタウンにはWCTC ショッピングセンターがあり、その隣にはハンパ・マートがある。オーナーが韓国人であるハンパ・マートではキムチ惣菜なども販売している。ハンパ・マートのハン＝韓（国）、パ＝パ（ラオ）、マート＝市場・スーパーマーケット、ということで韓国系の会社であることがわかる。アサヒ・フィールド（旧旭球場）の近くにはタイ料理店もある。ダウンタウンには日本人経営の居酒屋さくら（さくらは筆者がパラオを訪れる直前の2010年7月18日の営業後に閉店したらしい）などの飲食店が並んでいる。レストランは日本語での対応が期待できる。

宿泊したのはパレイシア・ホテル・パラオで、コロールの中心部にある。台湾系列のホテルで7階建てであり、パラオ1の高さである。旭球場は日本統治時代、戦前に造られた。パレイシア・ホテルから徒歩15分ぐらいの距離にあり、裏側のフェンスのところに日本軍の戦車が放置されている。戦車の上に置かれている高射砲は、戦後どこから持ってきて載せてあるのだという。そばには日本統治時代につくられた円形コンクリート製の貯水タンクがある。貯水タンクは一つではなく、少し離れたところにもう一つ残っている。これらの貯水タンクにはスコールを貯めていた。高台には南洋庁長官の官邸があったという。今も崖の下には防空壕が残っている。旭球場の近くにある「オーバー・ドライブ」はダイビング機材やおみやげの販売をしている。郵便局の向かいにある「ルー・エウengel・ア・イエデル」はギフトショップとして知られている。メインロードに並行する裏道はかつて芸者通りと呼ばれ、日本統治時代には置屋があって300人の女性がいたという。今、裏道にはパン屋（クマガイ・ベーカリー）があるだけである。

水族館（パラオ国際サンゴ礁センター）は屋外で観察するところが多い。頭足類（タコやイカと同じ類）であるパラオオウムガイもいる。オウムガイはアンモナイトに似ており近縁ではあるが、同類ではない。目が発達しておらず（レンズがない）、視力はよくない。普段は深度300メートルほどのところに生息しているという。汽水域にいるテッポウウオは、口に含んだ水を発射して昆虫などを撃ち落とし捕食するといわれるが、その瞬間を見ることは難しい。シャコガイは9種類あるという。天然のシャコガイはパラオ人のみに採取することが認められている。われわれが食べるシャコガイは養殖物なのだ。シャコガイは共生している褐虫藻（かっちゅうそう）という単細胞植物が行う光合成により栄養を得ているという。刺胞動物であるサンゴも褐虫藻と共生しており、褐虫藻が行う光合成から栄養を得ている。内海で、石灰質の骨

格を成長させるサンゴの場所に人間が立ち入って傷つけたりすると罰金を取られるという。もつとも、サンゴを傷つけるような場合には、人間の方も傷を受けることになる。イソギンチャクも体内に褐虫藻を共生させており、光合成産物を利用している。イソギンチャクは日中、触手環と口盤を拡げて光合成を促進しているのである。食材としてのナマコは、乾燥させて干しナマコとしてあるいは酢の物として生食する。サロンパスフィッシュ（スマレハナダイ）がいる。ナポレオンフィッシュ（メガネモチノウオ）はサンゴ礁に生息するベラ科の最大種で迫力があるが、おとなしい。タコは擬態（カモフラージュ）して姿が見えにくくなるが、興奮させると赤くなる。タコクラゲがいる。ロック・アイランドのひとつであるマカラカル島のジェリーフィッシュ・レイク（「5番目の湖」とも呼ばれる）がタコクラゲの生息地として知られる。タコクラゲには8本の足（口腕）がある。中には6本、10本、12本の個体もあるという。大きさは直径7センチほどで寿命は1年である。クラゲには眼点という光を感知する器官がある。体内に共生する褐虫藻が行う光合成から栄養を得ているのであるから、眼点で光を感知することは重要である。クラゲの天敵であるアカウミガメは「5番目の湖」にはいない。

水族館から博物館（エピソン・ミュージアム）に向かう道路は、昨年、日本の援助で西松建設が舗装を完成させたという。2年前まではガタガタ道であった。日本統治時代に設置された三つの信号が使われないうままに残っていたのが、道路完成に伴って撤去されたという。車道と歩道は分かれていない。車のスピードはゆっくりで、スピードを出す人は見られない。時速30キロほどで走っており、それが制限速度でもあるらしい。速度規制はあっても、検問をして取り締まることはしていないという。コロールには右側一車線・左側一車線に加えて中央部にもう一つのレーンがある。中央部のレーンは右折や左折のときに使われるらしい。

パラオ高校がある。他に高校は私立5校があるが、パラオ高校は唯一の公立高校で共学であり、授業料は無料である。通学が困難な他の島の生徒は、コロールに出稼ぎに来ている人や親戚の家に同居し、週末に帰宅する生活である。パラオ高校の門柱（石灯籠）は日本統治時代にあった社交クラブ「昌南倶楽部」のものだという。南洋庁本庁があったという場所があり、パラオ短期大学（パラオ・コミュニティ・カレッジ）がある。コミュニティ・カレッジのあるところは、日本統治時代、病院があったという。2006年10月まで最高裁判所であった建物は、日本統治時代の南洋庁パラオ支庁であった建物である。アサヒ・フィールドのそばには警察署・刑務所・消防署・税務署（平屋）・旧国会議事堂（ポールがある）がある。刑務所は警察の建物の裏にあり、留置場代わりに使われている。日本の富士宮市から寄贈された消防車があるという。ダウンタウンの南部、アサヒ・フィールドから南に歩いていくと「ベラウ・ナショナル・ミュージアム」がある。ミクロネシア最古である。

エピソン・ミュージアム（私立の博物館）にはお祝いのときに用いる、ジュゴンの形にたくさんのお木の実を盛った「料理」が展示されている。タロイモやタピオカをつぶすための道具もある。土方久功（ひじかたひさかつ）の写真も展示されている。久方は日本統治時代に美術教師として赴任していた人物で、ストーリー・ボードをパラオ人に教えた。ストーリー・ボードはマホガニーの板にパラオの伝説や神話を手彫りしたもので、高価である。ストーリー・ボードに掘り込まれた伝説や神話は古いものであるが、ストーリー・ボードそのものの歴史は古くはない。ここにはバイのミニチュアがある。バイというのは通常集会所のことで、釘を使わず木と木を組み合わせて組み立てた。入り口は小さく、頭を下げないと入れない。屋根はヤシの葉で葺いてある。現存する最古のバイは1890年ごろに造られたものだという。文字がなかつ

たので、絵が文字の代わりをした。バイには娼婦がいた。娼婦はバイのある村の女性ではなく、他の村から売春のために来た。彼女たちは強制的に連行されてきたのではないという。シャコガイで作った貨幣がある。石のお金（ストーンマネー）もある。ストーンマネーはヤップで使われていたもので、パラオで使われたのではない。ストーンマネーは今もヤップで使われているが、石の採掘の場はパラオである。「最初の子どもの誕生儀式」の写真が展示されている。これは産後の儀式である。パラオでは昔は帝王切開による出産をしていたという言い伝えがある。「パラオ人は・・・赤ちゃんが自然に生まれる方法を知りませんでした。妊娠した女性が陣痛を感じたとき彼らは竹のナイフで切り赤ちゃんを取り出します。ですから殆んど女性は一人目の子供を産むと死んでしまいます」⁽¹⁾というのだが、これは言い伝えであって、今は自然分娩による出産が行われている。

コロール州の法律により、午前2時から6時までは外出が禁止されている。もっとも、空港に向かう場合や緊急の事態で病院に行く場合にまで外出禁止令が適用されることはない。本来、外出禁止令は地元の青少年を対象としたもので、観光客を対象としてつくられたものではない。コロールには人口の8割が集中しているという。

マラカル島には2005年に新しくオープンした「パラオ・ロイヤル・リゾート」がある。ニッコー・ホテルズ・インターナショナルのチェーンホテルである。マラカル島とコロール島の間には「ロングアイランド・パーク」がある。ここは海の上の公園で、泳ぐことができる。マラカル島からミナトバシを渡ってコロール島に入って少し行くと、防空壕の跡がある。

アラカベサン島とコロール島を結ぶ「日本橋」は南洋庁によって昭和11年に造られた。元々は縁石がなかったというが、西松建設が改修した。この島には旧日本海軍の軍事基地があったという。

V. おわりに

海が荒れて、パラオ南端のアンガウル島には行けないことが多い。アンガウル島は小さいので、旧日本兵の駐留は1200人ほどであった。アンガウル島の人口は現在200人ほどだという。

「メスーラン」はパラオ語でありがとうという意味である。パラオ語になった日本語は多い。電気・自動車・電話など500語以上の日本語がパラオ語になっている。パラオは極めて親日的な国と言われ、戦前、約30年の日本統治時代の統治政策を評価する日本人の声もある。しかし、仮に、評価されるような統治が行なわれたとしても、パラオ人にとっては、外来の異民族の支配下に置かれたのだということを明確に認識しておく必要がある。

ペリリュー島やアンガウル島におけるような「尊い犠牲」があったからこそ日本に今の平和があるのだという人がいる。しかし、「尊い犠牲」はあってはならなかったものである。今、われわれがしなければならないことは「尊い犠牲」があったことを記録し、「尊い犠牲」を生じさせないように努力することが、英霊に対してわれわれが報いることのできる唯一のことであろう。

注

(1) マンディ・エピソン著、(有)オフィス野村翻訳、城郁子編、「パラオ」、正和企画出版舎、1994、P.50